

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0493500029		
法人名	社会福祉法人 永楽会		
事業所名	グループホーム のどか	ユニット名	
所在地	宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字浦宿81番4		
自己評価作成日	平成 24 年 1 月 25 日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://yell.hello-net.info/kouhyou/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成 24 年 2 月 16 日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念である”あなたらしさ”を大切に日々の暮らしをサポートします。心から笑いあえる暮らしと安らげる家。職員は利用者の混乱しない生活を守り共に暮らしたい。家族の一員として人生の先輩を敬い、「みなさんを頼りにしています。」と言う気持ちを忘れず支援をしています。施設入所に躊躇していたご家族の方には来る度に生き生きとして暮らすご本人の姿を見て、安心していただけるよう施設や職員との信頼関係を深めていきたいと思っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

石巻市と女川町を結ぶ国道398号線(女川街道)沿いにあるJR浦宿駅の東南へ5分ほど歩くと「グループホームのどか」がある。事業主体である「永楽会」が運営する特別養護老人ホームも近くにあり、看護師や栄養士との連携がとれている。建物全体に趣きと落ち着きあり、事業者の入居者を思う気持ちを感じる。毎月発行する「のどか瓦版」や入居者ごとの写真付き生活記録などに、日々のケアへの取り組みや実践の様子を見ることが出来る。平均年齢89歳だが、入居者の持てる力をうまく引き出し、健康や生き甲斐を維持している。職員はこれからも「入居者の思いに共感しながら」「一緒に、笑顔で、楽しみながら暮らしたい」と語った。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2 自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホームのどか)「ユニット名 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日常生活や今までの暮らしが維持できるような理念を掲げている。常に自分だったらということを想定し穏やかで混乱のない暮らしをサポートできるよう実践している。	法人理念の「あなたらしさ」を原点に、ホーム理念は先輩として敬いながら笑い合う生活と家族の絆や地域交流をうたっている。日々のカンファレンスで自身のケアを振り返り、入居者の力を活かすサポートをしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	立地的に工場地帯に囲まれていて近所付き合いや日常的な交流は出来ない環境にある。挨拶程度や利用者を見かけたときには声を掛けていただけるようお願いをしている。	震災後は地域交流の機会は減ったが、支援ボランティア(演芸や手芸装飾、見守り)の訪問は継続されている。近隣の方が庭のリンゴ狩りに誘ってくれたこともある。職場体験で訪れる中学生を入居者は歓迎している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ボランティア研修、中学生の職場体験の受け入れを行い、施設での役割や認知症の方々への接し方、支援方法等助言している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議では活動報告や意見交換を行い、ケア会議の場で再確認を行っている。	地域包括センター職員、区長、家族がメンバーである。行事への参加もあり、ホームへの理解が深く会議では職員へのねぎらいや感謝の発言が多い。今後、多角的視野からメンバーを加えたいと考えている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	情報交換や利用者間の相談、ボラ研習を通して協力しあい連携を図っている。	町が開催する「認知症ボランティア講座」の現地研修を引き受けている。区長を通して町の広報などをもらっている。運営推進会議に出席する地域包括支援センター職員と情報交換をすることが多い。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	一人ひとりの習慣や特性を知り、付き合うことを原則に玄関の施錠は夜間のみとしている。職員は利用者に合わせて対応方法をも身につけている。	研修での「入居者に振り回されてください」の言葉を胸に、入居者一人ひとりを理解し、「あなたらしさ」を大切にしている。「自分がされて嫌なことはしない」を基本に、1人外出には一緒に出たり、それとなく見守りなど拘束のないケアの工夫に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者には小さなことでも報告をすること、職員は他職員のシグナルを察しお互いが負担を抱えないよう注意しあうことを徹底している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内の研修に参加し勉強の機会がある。また後見人に話を聞く機会もあるが、まだまだ職員の理解度は低い。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	実態調査時の不安や疑問は契約時に説明を行い理解ができるよう努力している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	本部事務局にはお客様相談室がある。また面会にいらしたときにはご家族の要望や意見を聞き、要望に添えるよう努めている。	訪問時に笑顔で対応する職員に、家族は満足しており訪問し易いと述べている。「好物を食べさせて」にすぐに対応したり、「水が臭い気がする」には、業者による点検で正常を確認するなど適切な対応で信頼を得ている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は必要に応じて個別に話を聞き助言できる機会を設けている。また理事長の個人面談もあり順次行っている。	夜間入浴を可能にする細かなシフト変更や業務の時間割変更など職員の意見を反映させた例は多い。運動や歌、スコップ三味線などの活動は職員の発案であり、入居者本位の「あなたらしさ」の実践につなげている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人は資格に応じた手当を支給している。実務経験や実績を踏まえて資格取得への働きかけや研修への参加を促している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内では学ぶ機会がたくさんあり、できる限り職員が参加できるようにしている。また業務の中では個々の能力に応じ得意分野での業務に役割と責任が持てるよう分担をしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	開所1年目は施設体制作りの為職員が同業者と交流を図ることはできなかった。本年度もできていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	環境が変わることによるご本人のストレスが最小限に抑えられるよう、ご本人の訴えを聞き要望に添うこと。そして家族の協力を得ながら信頼関係を築いている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族とは密に連絡を取り合い施設に気軽に足を運んでいただけることで信頼関係を築く。暮らしや施設の理念をお話することで安心していただけるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	暫定のケアプランを立て精神状態の把握を行い、施設に馴染み安心した暮らしが早期に実現できるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立を促しできる部分がたくさんあることを自覚していただく。家族の一員として頼りにしていますと言う気持ちを常に表現している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族は協力的で関係は良好であったが、震災の為、罹災している家族が半数以上であり現在は家族の協力を得るのは困難である。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	震災の影響で馴染みの場がなくなってしまい交流の機会が少ないのが現状となっている。	宝くじを買う、撮り溜めたビデオを観るなど、従前からの楽しみを継続している。供え餅や秋刀魚の一夜干しなど生活の知恵を発揮し、外出から帰ると「え(家)さ着いであ」と言う入居者の、馴染みの居場所がここにある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	その時の状況、その場の雰囲気を感じ職員は仲立ちとなりトラブルにならないよう配慮しているや性格的なものや日々の関係を考慮し、居場所も工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じて支援や相談に応じて行きたい		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中や会話から本人の要望や希望を把握している。	どの入居者も意思表示ができる。会話のほかに雰囲気や仕草の変化にも気を配り、「何かしたい」気持ちを察して活動に誘ったり、一人が好きの人には個の空間を確保するなど入居者の思いを中心にケアしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人との会話や家族との歓談の中から今までの暮らしや生活歴の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活記録への記載、申し送りノートの活用、健康チェックを行い状態把握をおこなっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の暮らしや身体、精神状態の把握は毎日行っており、月に1回のケア会議、担当者会議を行い6カ月に1度のケアプランの見直し、更新を行っている。	ケア会議では生活記録と職員の意見、家族からの聞き取り、医師の助言を参考にモニタリングを行い、計画書は6ヶ月ごとに作成している。散歩・居室での食事・ダイエットなど状況にあわせた見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活記録への記載を行い職員間で共有し、介護計画へ反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人ひとりの支援は多様で日によっても対応方法が変わってくる。その場での解決やその時安心していただくような支援を心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	震災を受け地域資源も減少している。改めて地域資源の把握と協働の体制作りを図っていききたい		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	町内の病院を協力機関として緊急時や定期受診でお世話になっている。また利用者の希望により訪問診療も願っている。	希望する医療機関は概ね協力医を選択している。受診時は診療記録と生活記録を持参し、受診結果に変化があれば家族に報告する。月に1度、法人看護師の定期訪問があり、助言をもらうこともある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	バックアップ施設の看護師が月に1度の健康相談と称して訪問している。施設内で行える範囲の助言をもらい、健康維持に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	施設での自立状況を把握していただき、退院に向けては自立に向けての生活リハビリや機能訓練をしていただいている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	施設には看護師の配置はなく、終末期についてご家族はバックアップ施設への入居を希望している。今後の課題としてご家族の要望をしっかりと聞き施設での取り組みを検討していきたい。	入居時に行う説明のさいに家族の意向として同法人の特別養護老人ホームへの入所を挙げている。入浴介助が困難な状態を転所の時期と考えている。2010年開設以来、入居者は入居時よりも表情や体調も良くなっており、対応方針や意思確認の必要はなかった。	日常の延長上にある重度化・終末期と捉えていただきたい。文書化としてしているので、職員の研修やホームにできるケアについてもお願いしたい。具体的指針があることで家族の安心につながると考えられる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に応急手当や救命処置についての勉強会があり、ある程度の知識は身につけている。また定期受診の際に医師より助言をいただいている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	今回の体験をもとに、災害に対しての避難や備えについて検討を重ね、再度マニュアルの見直しを図っている。避難訓練も定期的に実施している。	消防署立会いで年2回の訓練を実施した。うち1回は夜間想定で行なった。入居者も戸惑うことなく行動でき、課題となった退室サインは次回に活かす。夜勤者の初期行動について皆が身につくよう訓練を考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライドを傷つけないようまた周囲の誤解を招かないよう配慮し、丁寧な言葉遣いと穏やかな声がけを心掛けている。時に家族になったり、友人になったりと状況に応じて対応できるようにしている。	職員は名前を呼ぶことの意義をよく理解している。プライドを傷つけないよう否定せずに何度でも話を聞いたり、トイレや着替えでは羞恥心に配慮するなど入居者が気持ちよく過ごせるよう支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その時の状況、その場の雰囲気を感じ職員は仲立ちとなりトラブルにならないよう配慮しているや性格的なものや日々の関係を考慮し、居場所も工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務優先はしないというのが原則、まずは利用者様と一緒にという支援を最優先にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個人の髪型や服装の好みを尊重している。また、こまめに整容(散髪・髭剃り・爪切り等)の声掛け支援を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の買出しから同行していただき、希望を取り入れながら楽しめるような食事作りをしている。また、調理や配膳などその方のできる事をしていただいている。	入居者の「中華を食べたい」「赤飯が好き」などの嗜好や季節の旬物を取り入れて、職員が献立を作成している。法人の栄養士から意見や助言をもらっている。外食では寿司やラーメン、洋食が人気だという。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分補給は常に気を配っている所であり個人の状態にあわせて確保している。食事形態や嚥下状態も個々に把握し完食できる量や形態での提供を心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立している方は本人に任せケア用品の補充や義歯等の相談に乗っている。毎食後の口腔ケアはしていないが、起床、就寝時には口腔ケアをおこなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	毎日の記録と申し送りにより排泄リズムを把握し、トイレ案内やシグナルを察知し可能な限りトイレでの排泄ができるよう支援している。	腰に手をあてたら誘導するなど、入居者をよく知り、自立への支援をしている。ほとんどの入居者が介助を必要としない。入居時のオムツやパッドから布パンツやリハビリパンツに改善しているのは適切なケアの成果と思われる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、定時での軽運動を行ない(自由参加)出来る限り参加していただくよう働きかけている。また、バランスの良い食事作りを心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	要望のある方に対してはできる限りその時間に提供できるように職員配置をしている。曜日は固定せず、必要時や清潔保持のための入浴も重視して提供している。	毎日入浴できる。入居者の希望に応えるために職員のシフト時間を細かく割り振って夜間入浴も可能にした。機能訓練や草取り後、同性介護などにも対応し、浴槽で歌をうたうなど楽しんでいるようだ。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	それぞれの方の生活リズムを把握した上で、状況に合わせ昼寝や就寝時間の配慮を行っている。安眠や熟睡ができるよう日中の活動や生活リズムの見直しもしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	出来れば薬(特に精神薬)は減らしたいと言うのが施設での考え方であり、その都度かかりつけの医師と相談しながら、服薬を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できる事を見つけて、やっていただくよう働きかけている。また、楽しみごとは出来る限り実現するよう努力している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご希望に添って積極的に行っている。また、こちらからも様々な場所を提案し外出していただけるよう働きかけている。	「天気良ければ出る」というほど頻繁に外出している。入居者の思いつきで運動場へ行ったり、外食やカラオケ、外気浴、忘年会、貸し切りバスで松島観光などである。個々の外出頻度に偏りが無いよう配慮もしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	小額の管理ができる方へは現金の所持をしていただいている。自分で日用品の買い物をする方、宝くじの購入を楽しみにしている方もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人の要望に添い電話や手紙のやり取りは自由にしていただいている(ご家族の了承や協力もいただきながら…)		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居場所が認識できるようまた、気持ちよく過ごせるよう工夫している。広いリビングは間仕切りや目隠しをして周囲から離れて過ごせる空間も作っている。	玄関を入るとつるし雛が目につく。季節に合った作品をボランティアが飾っている。リビングには畳敷きの一角があり、茶の間の雰囲気だ。食事や活動などで、入居者の笑い声が聞こえている。「ごは、いいごだよ」と入居者、訪問者との会話も弾む。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブル、テレビの配置を工夫し、それぞれの方が居心地の良い場所として過ごせるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使いなれた物を持ち込んでいただき、その方の好みや個性を尊重した居室になるようご家族にも協力を求めているが、理解をしていただくのは困難と感じている。	各居室の引き戸はデザインが異なり、入り口には椅子や装飾品などを置いて自室の識別をしやすいようにしている。居室はたくさんの調度品があったり、質素だったり暮らしぶりがうかがえるその人らしい設えになっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々に応じた設えができるよう担当職員は工夫している。できる事や分かることを前提にドアの開放や照明などの使い方も工夫している。		